

老梅山吉峰寺：老梅山吉峰寺の概要

吉峰寺は、禅宗・曹洞宗の開祖である道元禅師が 1200–1253) が 1243 年に越前（福井県）に到着後、禅の修行に従事した場所である。境内には、道元禅師が坐禅をしたと言われる大きな坐禅石があり、現在も参拝することができる。

13 世紀、寺には最小限の設備しかなかった。最も近い竈は、およそ 2 キロ離れた山の麓の村人の家にしかなかった。寺に住む僧侶のためのお粥を準備するために、徹通（てつう）（1219–1309）という名の僧侶は、1 日 2 回、村まで往復した。炊事、掃除、入浴などの日常的な作業を心からこなすことは、古くから、曹洞宗では重要なことであった。徹通（てつう）にとって、山の往復は日常の修行の一つに過ぎなかった。村人たちは彼の献身に驚き、山道を「徹通坂」（てつうざか）と呼び始めた。約 900 メートルの険しい山道には、慈悲の菩薩である観世音菩薩のさまざまな姿を描いた 33 体の石像が並んでいる。徹通は永平寺の第三代住職を務めた。

1244 年、道元禅師は新たに開山された大仏寺：永平寺の前身に移った。道元が離れた後、吉峰寺はほとんど放棄され、徐々に荒廃した。数世紀後の 1892 年、永平寺で修行していた田中仏心（1867～1914）という名の若い僧侶が吉峰寺を訪れ、廃寺になっていたことに衝撃を受けた。仏心は、全国各地の僧侶に復元の援助を求めた。仏心の努力の結果、1903 年、道元禅師 650 回忌を記念し、「法堂」（達磨堂）が完成した。残りの修復作業は 1907 年に終了した。

吉峰寺の特徴は、開山堂が一般公開されていることである。ほとんどの寺院では、開山堂への入堂は特定の階級の僧侶にのみ許可されている。永平寺の開山堂と同じように、開山堂の祭壇の中央には道元禅師の大きな像が安置されている。通常、そのような彫像は幕で隠されているが、吉峰寺では完全に公開され目にすることができる。